



健康の輪



編集●全国結核予防婦人団体連絡協議会事務局(結核予防会内) 題字●初代会長 廣瀬勝代

コロナ禍における婦人会活動

全国結核予防婦人団体連絡協議会／福岡県結核予防婦人会 会長 木下 幸子

令和の時代とともに予期せぬ新型コロナウイルス感染症が瞬く間に全国に拡がり、本県でもこの8月時点では終息に向かうどころか流行の第2波とも言えるような高い感染者数で推移しています。

今回のコロナ禍では社会全体を通して活動が制限されています。私たち婦人会も3月から活動を自粛しており、今後は感染状況を見極めながら活動していくことになると思います。

このようにコロナ禍の終息までしばらく活動の制限が続くと思いますが、これによって私たちがこれまで担ってきた地域社会での生活に根ざした活動はいささかもその意義を失うものではありません。逆に、この状況下だからこそ人との結びつきや共助の精神、連携・連帯といったことを大切にしなければなりません。そういった思いからこの状況の中でも私たちにできることを探して活動を始めることにしました。

その一つを紹介します。「コロナに負けるな」と全国各地でマスク作成ボランティアが広まりまし

たが、私たち独自の取り組みは複十字シール運動のマスコットキャラクター「シールぼうや」と「シールちゃん」のシールを活用してリボンバッジ・マグネットフック・ブックバンドを手作りすることにしました。

新しい生活様式のなかで、参加できる人が参加して、3密にならないようソーシャルディスタンスに気を配りながら楽しく活動して

います。出来上がった作品は今後の複十字シール運動の募金媒体として活用することとしています。

自分たちに出来ることから始めたこの活動ですが、正解があるわけではありません。初めて経験するコロナの禍中だからこそ、私たちの活動はこれからの時代の試金石として、そこから得た経験を新しい時代にふさわしい活動へと繋げていきたいと思っています。🐾



左からリボンバッジ、マグネットフック、ブックバンド

この度の感染症COVID-19が広がる中で

結核予防会総裁 秋篠宮紀子

感染症の拡大と子どもたち

昨年からはまった新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の拡大に関する報道が増えてきた3月上旬、一つの新聞記事が目にとまりました。イタリアである高校が休校した翌日、校長がホームページに掲載した「生徒への手紙」を紹介する記事でした。

その2ヶ月後、校長のドメニコ・スキラーチェ氏の「生徒への手紙」とその後日本の若者へ向けて記されたメッセージをまとめた本『「これから」の時代を生きる君たちへ』が出版され、私の手元に届きました。スキラーチェ氏は、手紙では、感染症の流行で普段の生活を送ることが難しくても、「冷静さを保ち、群集心理に惑わされないでください」と呼びかけ、散歩や良書を読むことを勧めています。そして、日本の生徒たちに向けては、「人間らしい思いやりを忘れないように」と語っています。

日本でも、2月27日の国からの要請を受けて、3月初めから、多くの小中学校と高校、特別支援学校の臨時休校が始まりました。春は卒業と入学の季節ですが、今年は感染症拡大防止のために、卒業式や入学式の形が変わり、謝恩会ができなくなるなど、突然の変更を余儀なくされた学校も多くありました。児童、生徒やご家族が寂しい思いをしないようにと、教職員が心をこめて工夫して対応したという心温まるお話もありました。

また、休校が続き、戸外で子どもたちが自由に遊ぶことも難しかった時期もあり、多くの子ども

ちと家族がストレスを抱えました。そうした中、国立成育医療研究センターでは、ストレスによる子どもたちの反応と、大人がとるべき行動をまとめ、ウェブサイトで順次公開しています。たとえば、まず子どもの話を聞いて、子どもの気持ちや、大人自身の不安などを否定せず「そうだね。ちょっと不安だね」などと共感することや、分かりやすい言葉で正しい情報を説明するようにと書いてありました。また、大人自身がリラックスしたり相談先を見つけたりすることも大切だそうです。

感染症について学び直す

この春以降、予定していた多くの行事が中止・延期となり、私も宮邸で過ごす時間が長くなりました。このため、結核予防会や母子愛育会などとオンラインで連絡をとったり、資料を整理したりする時間を作ることができました。また、今後の過ごし方について家族や職員と話し合うこともありました。

6月には、結核予防会と結核予防婦人会へ寄せたメッセージを結核予防会のホームページに掲載していただきました。結核予防会の複十字病院は、その時点で、20名を超えるCOVID-19の患者を受け入れていました。また、全国の支部では、健診の中止や制限がある中で、医師や保健師、看護師、事務職員を自治体へ派遣するなどの支援をおこなっていました。

結核予防婦人会の皆さまは、結核の予防活動が、COVID-19の予防にも通じることから、手洗いや咳エチケット、マスクの着用、疾病の正しい理解の重要性などを

人々に伝え、マスク作りなどにも取り組まれていると伺い、大変心強く思っておりました。

この機会に、結核予防会の会長を長く務めた故青木正和氏による『結核の歴史』や、結核予防会が編集した『証言で綴る結核対策 公衆衛生の歴史』を再読しました。日本における結核の流行と蔓延、サナトリウムでの療養による自然治癒の時代から、服薬治療で治せる感染症の一つになるまでの、患者の苦しみや、医療と公衆衛生の専門家の努力の跡を、改めてたどることができました。



青木正和『結核の歴史』

また、約100年前に大流行したインフルエンザについてふれた『日本を襲ったスペイン・インフルエンザ』や『流行性感冒』から、大正時代の日本の感染症対策について学ぶことができました。日本でマスクが日常生活の中で使われるようになったのは、この「スペイン風邪」と呼ばれるインフルエンザが1918年から世界で大流行し、日本でも40万人近くが亡くなった時期だそうです。

マスクを着けることや手洗いなどの身近な行動が、感染症の流行拡大を防ぐために大切であると見直されるようになりました。その一方で、乳幼児や接触皮膚炎になりやすい人など、マスクを着けることが難しい人たちがいることも、心に留めたいと思います。

感染症に関する情報、コミュニケーションについて

こうした中で、感染症とその対策に関する必要な情報を得ることが難しい人々のことを考えてきました。

視覚に障害をもつ人は音声や点字によって、聴覚に障害をもつ人は文字や手話、動画によって、必要な情報を入手することができます。視覚と聴覚の両方に障害をもつ「盲ろう」の人は、指点字や触手話などによって情報を得ています。

今年の夏に、宮邸で「盲ろう」である東京大学の福島智教授などから、オンラインで「視覚障害」、「聴覚障害」、「盲ろう」の人たちのお話を伺いました。

視覚障害者は、マスクをすると耳が聞こえにくくなり、歩いているときに危険を感じることもあるとのことでした。これは、盲ろう者も同様で、マスクが顔に当たると、そこに意識が向いてしまい、感覚を集中しなければならぬ指点字の内容がわかりにくくなったとのことでした。

また、聴覚障害者からは、マスクよりも透明のプラスチック製のマスクやフェイスシールドを使うことによって、相手の表情や口の動きを見やすくなり、コミュニケーションがとりやすくなると伺いました。手話通訳者がつけている「透明マスク」がありますが、数が限られているため、行き渡っていないところもあり、困っているという声があるそうです。

盲ろう者は、もし感染して入院するときに通訳が依頼できるか、病院関係者とどのようにコミュニケーションをとったらいいか、とても不安であると伺いました。サポートするガイドヘルパーとも「密」にならざるを得ないので、お互いに注意しているとのことでした。また、COVID-19に関する適切な情報が少

ないので、情報の充実を図るのが必要だと話されていました。

この他に、日本語がわからない人や、わかりにくい人も、COVID-19の情報を得ることが難しかったという話を日本WHO協会のオンラインセミナーで伺いました。

結核についての情報ならば、結核予防会のホームページで、英語、中国語、韓国語、インドネシア語、モンゴル語、ポルトガル語、タガログ語、ミャンマー語、ベトナム語、ロシア語、スペイン語、ヒンディー語、ネパール語、タイ語の情報を読むことができます。外国人結核電話相談も、日時の制限がありますが、英語、韓国語、中国語、ベトナム語、ミャンマー語、ネパール語でおこなわれています。

COVID-19の情報は、どのように提供されているか、調べてみました。

外国出身の住民が多い神奈川県や愛知県などでは、中国語、ベトナム語、ポルトガル語などでも住民へ情報を発信しています。

また、NHKや一部の自治体のホームページでは、災害情報を簡潔に外国出身の人に伝えるために提案された「やさしい日本語」で情報を伝えています。「やさしい日本語」は、漢字を少なくしてふりがなをつけ、尊敬語・謙譲語やカタカナ外来語を使わず、曖昧な表現を避け、日常よく使う言葉で言い換えて作ります。たとえば、COVID-19は、このように説明されます。

あたら
新しい コロナウイルスが原因と
なる病気です。
熱や咳がでて、とてもひどくなる
こともあります。
咳やくしゃみで他の人へ広がります。

視覚や聴覚に障害をもつ人も、日本語がわからない人も、相談できる相手が身近にいと、不安な気持ちが少なくなることでしょう。地域の人々の支えは、安心し

て生活する助けになると思います。

婦人会の皆さまが、日頃から、結核予防をはじめ、健康に関する正しい知識や必要な情報を地域の人々にわかりやすく伝えてくださることを、深く感謝しております。

世界メンタルヘルスデー

10月10日は「世界メンタルヘルスデー」です。心の不調や精神疾患に対する人々の偏見をなくし、メンタルヘルスへの意識を高めることを目的に、1992年にNGOの世界メンタルヘルス連盟が提唱したのが始まりです。その後、世界保健機構（WHO）も協賛するようになり、今年にはWHOが3時間弱のオンラインのイベントを開催しました。

このイベントでは、結核も取り上げられ、特に多剤耐性結核は、治療が長期間続き、将来への不安や周囲の偏見に悩む患者が多いため、結核の治療と共に心のケアも大切であると指摘していました。また、COVID-19により依然として世界中で多くの人々が不安定な状況に置かれているために、各国がメンタルヘルス対策をこれから強化するよう度々呼びかけていました。幾人もの方が話された“*There is no health without mental health*”（心の健康がなければ、健康はない）という言葉が深く印象に残りました。

皆さまも、心身の健康を大切にされながら、地域の支えとなりま

文献リスト

青木正和『結核の歴史』講談社、2003年
結核予防会編『証言で綴る結核対策』結核予防会、2016年
ドメニコ・スキラーチェ『「これから」の時代を生きる君たちへ』世界文化社、2020年
内務省衛生局編『流行性感冒』東洋文庫、2008年
速水融『日本を襲ったスペイン・インフルエンザ』藤原書店、2006年

ウェブサイト

国立成育医療研究センター「新型コロナウイルスと子どものストレスについて」
<https://www.ncchd.go.jp/news/2020/20200410.html>

全国結核予防婦人団体中央講習会に参加して考える コロナ禍における婦人会活動

一般財団法人福島県婦人団体連合会 理事
(福島県本宮市婦人団体連合会 会長)
遠藤 恵美子



中央講習会から6カ月

婦人会会員の皆様、お元気にお過ごしでしょうか？

新型コロナウイルス感染症対策で緊急事態宣言により推奨されたステイホームで、本宮市婦人団体連合会の総会もできず、資料配布のみとさせていただきました。

もとみやロードレース、こどもまつり、各地区や学校行事が相次いで延期・中止など、いままでとは全く違った生活となっております。

婦人会も活動ができない状況ですが、今年二月に東京で開催された結核予防関係婦人団体中央講習会で紹介され、心動かされた一文がありましたので、紹介いたします。

満点から始めよう

「人間関係学」(松村康平著)をご紹介します。

満点から始めよう

今ここで新しく

つけるなら、自分にも満点を、ほかのひとにも満点をつけて、いまここで・新しく、満点から始める。

だれもがひとりひとり、かけがえのないひとりひとりなのだから、十点満点でもいい。百点満点でもいい。満点をつけて、ここか

ら始める。

このことを手がかりにして、今・ここで・かかっている、自分と人と物とのかかわりを育てて、自分も人も物も大切にされる社会を創る。

わたしたちが自分から、できることをひろげていく。

自分が挫けぬことによって挫けそうになるほかの人も、ふるい立つことができるように、勇気をもってする。

新しい気づき

「満点からはじめよう」の言葉を聞いてからは、誰もが素晴らしい人だと率直に認めている自分に気づき、自分のころろまでが豊かになっていくような気がしました。また、人の出会いや、付き合っていく、相手のいいところを見つけて、認めあうことが大切だと思いました。

今までは自分や相手に対して、いつでも減点方式で評価してしまっていた自分がいました。これは幼いころから満点が十点・百点のテスト形式の競争社会の中において、自分自身に余裕のない自分がいました。

余裕は自分で作るものであって与えられるものではないと思います。

叱られるのは嫌だから頑張って頑張って褒められようとする自分がいて、結局は心も身体もついていけなくなってへとへの抜け殻

に……。

また、子育て時代に聞いた言葉「あれもこれもできない子」ではなく、今日はこれができた！ とできたことを一緒に喜ぶ大切、今は孫に対しても。

「満点から始めよう」この言葉に込められていることを思い、ひとりひとりの尊重、人間を大切に作る心、温かい思い、みんなで笑顔になってもらいたいです。

こんな世の中がくるとは予想だにできなかった時代です。

小さな幸せでも大きな幸せに感じ取る気持ちが大事です。

地元での活動に向けて

本宮市は今年の台風19号の被害がいまだに残っています。この状況を前向きにとらえて、私たちができることをみつけ以前のような住みたい市、福島県No.1の「へそのまち本宮」になるよう前進したいと思っております。

まだまだ終息が見えない中、自分たちができる感染予防を実践しましょう！！

コロナが収まったら皆様に何気ないことが幸せ、生きていることの幸せとを感じる心のご褒美がもらえます。医療従事者の方々・自分にもエールを送り、婦人会活動が再開できる日を楽しみにしております。🐱

青森県結核予防婦人会
会長 種市 恭子



7月30日(木)に結核予防会青森県支部の菊地公英専務理事、須藤昭彦常務理事他4名と、私達4名が知事表敬訪問。三村申吾知事自らのお出迎えに恐縮しながら着席。まず同席しました皆様のご紹介から始まり、例年8月1日から世界共

通の結核予防のための複十字シール運動が始まり、日本では各都道府県結核予防会支部や婦人会組織が中心になって運動を行っており、結核を制圧し肺がんその他の呼吸器疾患をなくすための活動資金として募金の協力を呼び掛けていること、私達の訪問は今年で15回目になり本県の結核状況を2年前の統計に基づき具体的な数字を説明、そして、コロナで結核対策に影響が及ぶことが心配であることをお伝えしました。

知事は熱心に耳を傾け、年間22名も結核で亡くなっていることに驚き、「コロナより油断できない怖い病気を知ってもらうのに重要な活動」と運動に賛同下さいました。記念品に大型シールとシールぼうやをつけた手作りエコバックを贈呈後、記念撮影を行い、知事室をあとにしました。

この模様は、東奥日報7月31日(金)にカラー写真入りで「新型コロナの陰 結核対策に目を」と題して掲載されました。🐱

複十字マーク入りマスクで表敬しました



石井隆一富山県知事を表敬訪問

富山県結核予防婦人会
会長 岩田 繁子



去る7月28日(火)、複十字シール運動の開始を前に、結核予防会富山県支部・健康増進センター能登啓文所長他1名、婦人会役員等5名

が、県庁に石井隆一富山県知事を訪問、活動への協力をお願いしました。新型コロナウイルス感染症の拡大防止のため極力人数を抑えての訪問でしたが、県からは、知事他、石黒雄一厚生部長、木内哲平厚生部理事、松倉知晴厚生部参事、菊地正寛健康課長が出席されました。本運動の趣旨や意義、目標、活動の様子等についてお話すると、知事からは、私たちの日頃の活動

に対する感謝の意に加えて「皆さんと協力し結核の対策に取り組んでいきたい」との温かいお言葉をいただきました。

今、新型コロナウイルス感染症が世界中で猛威を振るう中、どちらの感染症についても学習を深め、正しい知識をもち、自分たちの身に直結したこととして公衆衛生の知識を広めるよう努力していきたいとの思いを新たにいたしました。🐱



香川県結核予防婦人会
会長 野田 法子



現在、世界中で新型コロナウイルス感染症の拡大が止まらず、感染症対策の難しさを目の当たりにしております。人類は昔から感染症と闘ってきました。結核もまた細菌の空気感染による感染症ですが、BCG接種や咳エチケットの普及、

きちんとした服薬（DOTS〈ドット〉）等によって、日本の罹患率は低下しています。新型コロナウイルス感染症も、有効な薬の製造や新しい生活様式の定着によって、早く終息することを願うばかりです。

さて、結核予防婦人会は結核予防に関する啓発活動・健診奨励・複十字シール運動などを、永年継続的に行って参りました。

今年度も、複十字シール運動期間（8月～12月）に合わせて、8

月4日、結核予防会香川県支部長久米川啓氏とともに、浜田恵造香川県知事を表敬訪問し、結核制圧の訴えと複十字シール運動への協力をお願いして参りました。

表敬訪問の様子は、8月6日（木）の地元紙朝刊（四国新聞）に掲載されました。

また、9月8日には結核予防会香川県支部と協力して香川県社会福祉総合センターで複十字シール運動の啓発活動を行いました。🐾



8/4知事室において



9/8香川県社会福祉総合センターにおいて

健康を守る佐賀県婦人の会
会長 山口 七重



複十字シール運動」開始に当たり、8月5日県健康づくり財団の樗木等副理事長とともに、健康を守る婦人の会役員3名で県庁を表敬訪問しました。県健康福祉部の大川内直人部長に啓発グッズを手渡し、

活動への協力をお願いしました。大川内部長からも「一緒に予防に取り組みましょう」と力強いお言葉を頂きました。この訪問について、翌日の佐賀新聞に写真入りで掲載されました。

県内では2019年に新たに結核を発病した人は108人で前年より28人増えています。特に高齢者の割合が高いので、より注意が必要です。

今年はコロナ禍で街頭募金ができないことや、各地区での秋祭り

イベントが軒並み中止となり、どのようにしたら県民、市民の皆様に普及啓発ができるのか考えました。そこで、私の地元ではメディアを利用し、役員でタスキとグッズを持ってテレビ出演し、広く「複十字シール運動」の大切さや募金活動へのご協力をお願いしました。大好評でこれからも続けたいと思います。🐾



公益社団法人全国結核予防婦人団体連絡協議会 理事就任ご挨拶

〈理事〉
 (石川県結核予防婦人会会長)
 能木場 由紀子



令和2年度の
 理事会にて、東
 海北陸地区より
 全国結核予防婦
 人団体連絡協議
 会の理事を拝命

いたしました。理事就任に際し、
 責任の重さを痛感しております。

世界三大感染症のひとつである
 結核は、肺の生活習慣病といわれ

ています。結核予防に関する正し
 い知識と対策を行政と一体となっ
 て推進していくことが重要である
 と思います。

日本では結核は明治時代から
 「国民病」と呼ばれ、石川県もか
 つては「結核王国」といわれて戦
 前まで結核による死亡率が全国で
 最も高い時期があったと聞いてお
 ります。

結核が蔓延していた時代に生ま
 れ育った世代が70歳以上になり、
 かつて感染した結核菌が休眠状態

であったものの、年齢を重ねるに
 つれ、免疫力の低下とともに発病
 に至るケースが少なくないこのこ
 とです。

私たち婦人会の活動は街頭啓発
 運動をはじめ、各県知事表敬訪問
 により複十字シール募金運動の理
 解と協力をお願いしています。100
 年近く続いている世界共通の募金
 活動であることを再認識し、開発
 途上国への支援につながる運動を
 より強化していきたいと思いま
 す。🍷

新会長就任ご挨拶

青森県結核予防婦人会
 会長 種市 恭子



第67回全国地
 域婦人団体研究
 大会を令和元年
 という記念すべ
 き年に皆様のご
 協力のお陰で開

催できましたこと心から感謝申し
 上げております。

今年度は、新型コロナウイルス
 感染症のため総会は中止、コロナ
 感染リスクを排除しながらの理事
 会で役員改選が行われ辞退してい
 ました会長職を6月2日、1期2
 年のお約束でお引き受けし重責を
 感じております。この様な時に元、
 青森県の故田中栄子会長が平成9
 年に全国結核予防婦人会々長時の
 20周年記念誌「すこやかに」に出
 会い、発足当時からの歴史と会員
 皆様方の連帯と共生の精神に深い
 感銘を受けました。先人の皆様方
 の運動に敬意を表し、結核の現状
 を正しく認識し、結核予防会青森
 県支部の御指導をいただきなが

ら、複十字シール運動を通して結
 核予防啓発活動を会員一同推進し
 て参りたいと思っておりますので、
 よろしく願い申し上げます。🍷

神奈川県地域婦人団体連絡協議会
 会長 石川 壽々子



今年度より神
 奈川県地域婦人
 団体連絡協議会
 会長に就任いた
 しました。

就任早々より
 国内外新型コロナウイルス感染症
 の蔓延のため、毎年8月に実施し
 ております「県知事表敬訪問」や、
 「複十字シール運動街頭キャン
 ペーン」も中止のやむなきに至り
 ました。

かつて結核は不治の病として恐
 れられていましたが、医学の進歩
 と生活衛生の改善により罹患率は
 減少し完治できる病となりました。
 新型感染症も各国でワクチン
 等の研究が進み一日も早く制圧で
 きるよう願っています。

結核は中蔓延国と位置付けられ

久しいですが、患者の高齢化によ
 る合併症患者の増加と外国籍患者
 の増加、薬剤耐性結核への対応な
 どへの認識を深めていく必要性が
 あります。私たちは結核予防婦人
 会の一員として、一人ひとりが健
 康意識を高め、家族から地域社会
 へと普及啓発を進めていきたいと
 思いますので、会員の皆様のご協
 力をお願いいたします。🍷

山梨県愛育連合会
 会長 雨宮 登美子



この度、新し
 く山梨県愛育連
 合会会長に就任
 いたしました雨
 宮登美子です。
 職責の重さを考

えますと、改めて身の引き締まる
 思いがしております。

当会は、結核予防の推進や啓発
 の活動に取り組み、結核予防週間
 の街頭キャンペーンでの呼びかけ
 やチラシの配布、また、全国大会
 に参加し、研修を重ねてきました。

これらの学びから、結核は昔の

病気と思っていましたが、国内(県内)でも多くの方々が結核を発病していると知り、重大な感染症であると再認識しました。

現在は、未曾有のコロナ禍にあり、共に感染予防が大切です。

最後に、微力ではありますが、地域の方々が健康で安心して暮らせるように、「声かけ・見守り」に務めて参りたいと思っています。🐱

**兵庫県結核予防婦人会
会長 友藤 富士子**



今年6月兵庫県結核予防婦人会会長に就任致しました友藤でございます。どうぞよろしくお願い致します。

婦人会活動の中で、以前、御殿場の講習会に参加させて頂いたことを思い出します。結核予防対策の継続性を改めて考えさせられます。

結核は昔の病気ではありません。

今でも1日43人の新しい患者が発生し、6人が命を落としている日本の重大な感染症です。健康的な生活が、予防につながります。

結核とともに感染症に関する啓発は一人ひとりの意識が大切だと思います。新型コロナウイルス対策と感染拡大を予防するため、新しい生活様式をとり入れながら、地域の方々や行政の皆さんと、複十字シール運動の呼びかけを通して、結核を含む感染症予防や健診の受診勧奨などを継続してまいります。🐱

**和歌山県健康を守る婦人の会
会長 宗 真紀子**



今年度、和歌山県健康を守る婦人の会会長に就任いたしました宗でございます。

本年2月頃から新型コロナウイルス感染症が猛威を振るい、多くの方が罹患され、お亡くなりになられた方も少なくありません。

このような状況の中で、今年も結核を患っている方々がいます。

私達は、今一度「結核は過去の病気ではない」という認識を新たにしなければなりません。そして、会員自身も結核予防について正しく理解し、特に、結核を知らないという若者にも、複十字シール運動を通して結核予防啓発運動を進めていきたいと思っています。

しかしながら、コロナ禍の中では、例年のような活動を行うことは難しいと思われまます。

「with コロナ」と言われる現在、結核も新型コロナウイルス感染症も予防する啓発活動を工夫しながら積極的に取り組んでまいりたいと考えています。そのためにも先輩の皆様方のご指導、ご鞭撻の程よろしくお願い申し上げます。🐱

**健康を守る佐賀県婦人の会
会長 山口 七重**



令和2年7月より健康を守る佐賀県婦人の会会長のバトンを渡されました。

重責に押し潰されてばかりはいられない。既に全てが動き出している今、全身に初心者マークを貼り、アンテナを高くして更に前進したい思いです。

私たち健康を守る婦人の会は地域婦人会と両輪として活動しているため、毎月、会長会を行い、地域の様々な行事や活動に参画し、明るい地域づくりに努めています。

今年から複十字シールが新しくカラフルになりました。シールぼうやも加わり、シールを通して若い世代へも結核について知ってもらうきっかけになることを願い、

募金活動を続け、地域を守っていききたいと思います。

ご協力宜しくお願い致します。🐱

**沖縄県結核予防婦人連絡協議会
会長 與那覇 信子**



私たちが経験したことのないコロナ渦の状況下で沖縄県結核予防婦人連絡協議会定期総会書

面審議(4月28日付)を行い会長に選任されました。宜しくお願いします。

就任と同時に急速に新型コロナウイルスが世界中に拡大し、日本でも大変な状況になり、消毒液、マスクの不足等の情報がマスコミで報じられる中、沖縄県各地域婦人会員が積極的に手作りマスクを作成し、地域の市、福祉施設、介護施設・保育園、学校等に贈呈し地域新聞等に取り上げられています。沖縄県婦人会長として力強く思っているところです。

沖縄では、Go toトラベルキャンペーン後コロナ感染者が多発しております。

複十字シール募金運動は、毎年、沖縄県知事を表敬訪問し理解と協力をお願いし、沖縄県のメインストリートである県民広場において街頭啓発を大々的に実施していますがその取り組みに支障をきたしているところです。

「withコロナ」と言われています。沖縄県においては、十分に対策を行いながら複十字シール運動の輪を広げていきたいと思っています。🐱

新型コロナウイルスパンデミックと婦人会活動に思う —新たな差別と偏見をなくすための教育(学校、地域、社会)の重要性について—

東京家政学院大学公衆衛生学
教授 松田 正己



はじめに

日本で新型コロナウイルスの感染拡大が問題になってから半年以上が過ぎようとしています。

8月末に参加したズームによる健康福祉政策学会では、全国の現場の保健師さんや医師の方々から、コロナに感染した人に対するさまざまな差別や偏見が起きているという報告がありました。

たとえば、ある地域ではコロナに感染した人の家の窓が割られたり、都会でコロナに感染し帰郷した子どものいる家族の場合は、周囲の目があまりに厳しく、その地域にいられなくなったりするという事例まで起きています。

また会社勤めの場合、コロナに感染するとどこで感染したか調べられ、自分の行動(個人情報)が会社の同僚全員に知られてしまうのが、感染そのものより怖いという人もいます。

正しく怖がるには

感染症に対する差別と偏見は、過去の例(ハンセン病など)をみても根深いものがあります。そうした差別・偏見をなくすため、これまで学校や地域、職場などで予

防教育が推進されてきました。

結核予防婦人会は、結核を中心にその一翼を担ってきた団体です。その功績は大きく、かつては結核患者のいる家の前を通るときは、手で口をふさいで走り抜けるといったことがあったのが、今はタレントが結核に感染したことをテレビで話せるまでに、偏見は減っています。それは歓迎すべき変化ですが、逆に結核に対する関心が薄れたり、忘れられたりすることが懸念されます。

感染症を怖がりすぎて患者・家族を非難するのは問題ですが、逆に病気が軽視され、予防が無視されてしまうのも危険です。よく言われる「正しく怖がる」というのは、そういうことを意味しているのでしょうか。

予防のための教育

日本では1998年に「感染症の予防及び感染症の患者の医療に関する法律」(感染症法)が制定されましたが、感染症に対する偏見がなくなったとは残念ながら言い切れません。

1990年代以降、HIV/エイズの感染拡大に対処するため、学校や地域で予防教育が始まりましたが、HIVの予防に加え、感染者や

患者を非難・差別してはならないことの教育にも重点が置かれました。その知識は若者を中心に徐々に普及していると言えます。

コロナ禍にあって

こうしたことを振り返ると、新型コロナウイルス感染症(COVID-19)という感染症に関しても、予防教育と共に、差別・偏見を防止する教育が必要でしょう。また、防災中心だった地域や企業の危機管理に、感染症対策が含まれていることが、これまで知られていなかったことから、今後は地域、学校、企業(社会)が連携して、COVID-19など感染症の対策に取り組むことも重要です。

結核予防婦人会の皆様へ

結核予防婦人会には、結核という感染症とそれに対する偏見を防ぐための人間性に満ちた活動記録が蓄積されています。その貴重な経験を踏まえ、さらに他国の知見にも学びながら、コロナ禍で起きている差別と偏見を乗り越え、地域で人々を守るための予防教育に取り組んでいただきたいと思います。🍗

コラム 私の趣味

埼玉医科大学社会医学
教授 亀井美登里



来る祭典に胸躍る

私の趣味はスポーツ試合の観戦である。昨年は夏の終わりから秋にかけてラグビーワールドカップ2019日本大会という祭典に興奮し感動の渦の連続であった。予想を超える日本チームの活躍に胸躍っていた。そして、今年は昨年以上のドラマが繰り広げられるのではないかとワクワクしていた。そう、東京オリンピック・パラリンピック2020の日本チームの大活躍を期待していたのである。

ところが……。

コロナ禍で生活一変

新型コロナウイルス感染症（COVID-19）が拡大する中、今年3月24日に東京オリンピック・パラリンピック2020の1年程度の延期が決定し、同月30日には2021年夏に延期されることが正式に決まった。

COVID-19流行が本格化した4月16日には特別措置法に基づく緊急事態宣言が全都道府県に拡大され、誰もが自粛生活を余儀なくされた。5月のゴールデンウィークは外出自粛でステイホーム週間。感染防止のため、ソーシャルディスタンスの確保、マスクの着用、手洗いを留意し、地域の移動は制限された。

日常生活を営む上で3密の回避、こまめな換気、体温測定等が求められた。多くの人が集まるイベントや買い物等も制限された。テレワークや在宅勤務にシフトし、朝晩の通勤電車の乗客はまばらとなった。およそ数か月前には予想もしなかった非日常的な毎日が続いた。

趣味が奪われる

辞書によれば、趣味とは専門としてではなく、楽しみとして愛好する事柄なのだそうだ。

毎年春の甲子園、プロ野球の開幕を風物詩の如く年度の始まりとして感じていた。テニスの世界最高峰グランドスラム四大大会の一つウィンブルドンテニス（6月29日～7月12日開催予定）や男子ゴルフ4大メジャーの一つ全英オープン（7月開催予定）は中止された。

いずれの試合も毎年テレビ中継を楽しんでいた。つまり、COVID-19によって趣味も奪われてしまったことになる。無味乾燥な日々には呆然とした。

自分を見つめ直す機会

コロナ自粛期間中、いつも楽しみにしているスポーツ観戦は叶わなかった。その代わりに、テレビの番組等で放映された過去の心に残った試合等を見ていた。すると、

当時の感動が蘇ってきた。意外なことにその体験こそ、自分を見つめ直す良い機会ともなった。

民間の調査によれば、ステイホーム週間中、「自宅でゆっくり休む」に次いで多かったのは「部屋の片づけ・大掃除をする」。聞くところによれば、いわゆる「断捨離」*を実行された人々が結構いらっしまったとか。これもある意味、ご自身のそれまでの生活を見つめ直すことに繋がったのかもしれない。

コロナ後の世界に向けて

広井良典教授（京都大学こころの未来研究センター）によれば、COVID-19によってニューノーマル（新常态）がもたらされるのではないかという。本来の人間的な生活（ノーマル）を実現していくチャンスでもある。

趣味を喪失したことで分かったのは、趣味を通して日々の生活に感動という贈り物をいただいていたという実感。Withコロナ時代でも心を動かすことは忘れないでいたい。🐱

※「断捨離」とは：モノへの執着を捨て不要なモノを減らすことにより、生活の質の向上・心の平穏などを得ようとする考え方のこと。もともと断捨離はヨガの「断行・捨行・離行」から生まれた言葉。2009年刊行の「新・片づけ術『断捨離』」（やましたひでこ著、マガジンハウス）より提案された。

2019年度複十字シール募金 結果報告

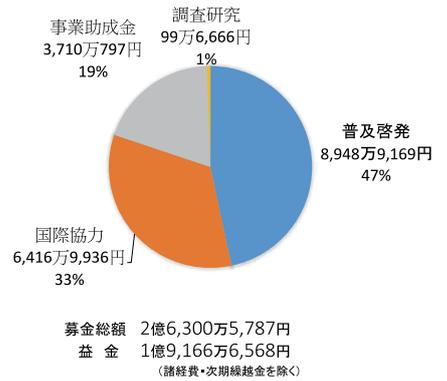
2019年度の複十字シール運動は、厚生労働省、文部科学省、公益社団法人全国結核予防婦人団体連絡協議会の後援を得て、全国規模での普及啓発および募金活動を実施することができました。婦人会の皆様には、運動への協力依頼のための知事表敬、結核予防週間中の街頭募金活動、様々なイベントでの結核の啓発活動等、多大なご協力をいただきました。心より感謝申し上げます。

昨年度の募金総額は2億6,300万5,787円、そのうちの5分の1にあたる5,634万円は婦人会を通していただきました。諸経費と次期繰越金を除いた募金の使い道は図の通りです。結核予防の広報や教育資材の作成、研修会や結核予防全国大会等の「普及啓発」、ザ

ンビア・カンボジア・ネパール・ミャンマーの結核対策・人材育成等の「国際協力」、全国の結核予防団体の活動への「事業助成」、結核の「調査研究」に使わせていただきました。

昨年度はこれまでに発行したシールの図案を用いた復刻版シールを発行しました。婦人会の皆様からは「懐かしい」との声をいただき、多くの方々にあらためて「結核」を知っていただく一年となり

図 2019年度 募金の使途内訳



ました。婦人会の皆様のご支援に重ねてお礼を申し上げますとともに、引き続き、複十字シール運動へのご理解とご協力をよろしくお願いいたします。

(事業部募金推進課)

結核予防会寄付型自販機設置のご報告

2019年9月長崎県で2台目の寄付型自動販売機を日本赤十字長崎原爆諫早病院に設置していただきました。

写真は、左から長崎原爆諫早病院川良事務部長、長崎県地域婦人団体連絡協議会西山会長、長崎県健康事業団平尾前常務理事。



患者さんの
Quality of Lifeの向上が
テイジンの理念です。



TEIJIN
Human Chemistry, Human Solutions

ちふれ化粧品は・・・

「誰もが手に入れやすく、安心してつかえる化粧品を。」という思いを込めて創り出した私たちの化粧品です。



ちふれが、約束すること。

- **高品質・適正価格であること。**
製造や販売にかかる余分なコストを削減して、高品質を適正な価格でお届けします。
- **無香料・無着色であること。**
肌によさしくありたい。だから、ちふれのスキンケアはすべて無香料・無着色です。
- **全成分・分量・配合目的を公開すること。**
品質の確かさや商品の安全性だけでなく、自分の肌に合った化粧品の内容を知っていただくためにも、すべての製品の全成分・分量とその配合目的を公開しています。
- **製造年月をすべての容器に表示すること。**
誰にもわかりやすく、安心して使えるように、製造記号を製造年月で表示しています。
- **環境問題に配慮すること。**
毎日使う化粧品だからこそ、環境を大切にしたい。ちふれは、詰替化粧品や植物由来容器の導入などで、環境問題に配慮しています。



ちふれ

あなたの、健康のそばに。



しあわせは、明日も健康であること。

人々の健康意識を高めること、日々の生活をOTC医薬品でサポートすること。それが「セルフメディケーション」をスローガンに掲げる私たち大正製薬の使命。

OTC医薬品のリーディングカンパニーとして、

より優れた医療用薬品の開発に力を入れるチャレンジャーとして、常に「生活者の健康でより豊かな暮らし」の実現を目指しています。